

Title	大島清・ 斎藤晴造・ 加藤俊彦・ 玉野井昌夫著 金融論
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.2 (1961. 2) ,p.157(81)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610201-0082
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610201-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

家政第一の歴史的發展の跡が辿られている。そして第三部において戦後の福祉国家イギリスで行なわれた実際の経済政策が検討され、その問題点が解明されている。特に福祉国家政策の支柱ともいえる社会保障政策については、詳細に検討されており、裨益させられるとこ

○・プリントン著
河原宏・浅沼和典訳

「近代精神の形成」

Modern Mind, New York, 1953 (Ideas and Men: Chapter 8-15)

表的な国として、世界の注目を浴びてきたが、経済成長が緩慢すぎる点や、インフレや国際収支の問題などいろいろな困難を経験しているので、こうした困難が福祉国家の責任であるかの如く論ずる者も少なくない。しかし、長教授はそれらの諸問題を検討するこによつて、それが必ずしも福祉国家の責任でないことを明らかにする。こうして、福祉

革命の解剖】その他の著者として有名なハーヴィード大学歴史学教授C・プリンツン(1888)は、本書において彼の従来の史的研究から一步を進め、各分野にわたる博識をもつて一般思想史の面から近代精神の形成とその展開をながめ、近代精神によつてたつて西欧民主主義の今後のありかたを見ようと試みる。

国家政策をあくまで擁護し、福祉国家建設の道を示唆したいというのが本書の意図である。――（東洋経済新報社、一九五九年・A5・二九九頁・五五〇円）

において相互作用をもつものと規定し、各時代の思想をみるに当つてはエリートの思想のみならず、大衆の誰しもがもつ生活様式の一部としての人生観—世論というものにまで目をむけるのである。こうした態度をもつて十五世紀以後の西欧を対象とし、近代精神の形成をヒューマニズム、プロテスタンティズム

これまで思想史面にすぐれた業績のみられなかつたアメリカにこのような労作が現われたことは注目に値しよう。そしてわれわれは改めて、人々の心に深く根ざす民主主義というものについて考えさせられるのである。

本論」の論述にもみえるとおり、信用理論が豊富な事実認識の上にたつてでなければ真に体系化しえないという困難さによるところも多いであろう。かかる意味合いにおいては、信用理論の展開は厳に論理的歴史的でなければならないと考へられる。

大島清・齊藤晴造
加藤俊彦・玉野井昌夫著
『金融論』

從來、信用理論の分野では「資本論」研究の一端としての、とくに第三部・第五篇を中心とした利子生み資本論としての研究がなされ、飯田繁氏の「利子つき資本の理論」(一九五四年)、信用理論研究会の「講座信用理論体系」全四冊(一九五六)をはじめ、宇野弘蔵氏、川合一郎氏、三宅義夫氏、麓健一氏などの諸労作、また銀行券論争などと、いわば原理的視点からの研究が多い。そのことは信用理論が、いまだ新しい研究領域であることと示しているといえるし、また、「資

体系化の企図もあるのであって、渡辺佐平氏の「金融論」（一九五四年）および本書などは体系化への指標をそれなりに示唆しているといえよう。だが本書の意義は、たんに信用理論の体系化にとどまらず、信用理論を基軸にした金融論という領域を設定し、それをマルクス経済学の中に体系づけるという基本的問題にもせまろうとしているところにある。いわゆる「宇野理論」の立場にたって書かれている本書は、金融論を原理論とはことなつた視点からながめる。そして「金融論」というのは資本家的生産方法に必然的に随伴し展開される信用、その形態、制度、および金融政策を究明することであるが、しかしそれは、原理論が取扱うべきとは異なつている。「金融論」が対象とするのは、資本主義

ム、合理主義の三つの平行した流れの交錯の下にとらえる。そしてこのなかから現われてきた意見の多様性が、どのように発展し、その深さとひろがりがどのように変化してきたかをさぐることによって、彼は第一に自己の人生観を明確にすること、第二に他人の人生観を理解することによって他人とより円満な生活をしうるようになることを望むのである。すなわち啓蒙思想の所産としてのデモクラシーの正常な状態を意見の多様性にみる。しかるに現代思想の多くが啓蒙思想の嫡流として、人間の自然的善性、合理性の教義を中心とすることに対し、著者はこのアンチテーゼとしての反主知主義を重視する。しかし彼は反主知主義に影響はされるが、同調はしない。ただ現実と理想との緊張関係を、理想を現実に近づけることによって、緩和しようとするのである。かくてこの方法こそ眞の、すなわち理想的でも冷笑的でもない、現実主義に基づいたデモクラシーを可能ならしめるものであり、こうしたことの可能な健全な社会の存在を疑つてはならないというのが著者の結論である。